東京大家 十四家集評論辨 一

本間文庫
文庫 14
D 82

文庫14
D82

此十四家集評論辨ハ全篇スデニ稿ヲ脱シタレハ速ニ全部出版スベキ處丁數頗多ク印刷等ノ都合モアリテ意外ニ遅延センコトヲ恐レ此度先ツ序文ヨリ春ノ部マテヲ印行シ引續キ夏ノ部已下凡四五回ニ割リ合出版スベシ看官請フコレヲ亮セヨ

編者白

天凝
本間文庫

序

先つころおのかもとへしれるなる今井のなにがし
東京大家十四家集評論といふ書をたづさへ来
りてこの論をよしやあしやとのたまへとあるまゝ
おのれその頃源氏物語披見ましとて机
りよせてものしつるをとりいれいとくるさき
九てあつ江戸歌合のあつひたる契しとのいひ
説き候とてゆかしきおもとおかしやうに
とかくれは此とひしぬとひしふとさみ

まゐかはりし大祥なりけれは藤式部家にあれなりけり
ひそとてうつし奉らむとするにそはいつのなかなるに
とらよみかへしてひていくはうつわ計らく此千四
家の人々はおのれのしるしなき思ひぬれあるまじいい
はれやうしのきぬくとよはあしけとまいりうちはら
こゝろよ大かたは今のよのなかてさやされまたおほ
やうよはたゝの人まゐれる人こそおほくの事海上
ぬけしいつのなかの人ありしの之まつ孫とこの世と
さねておもむきていさゝのみ婦し乎れいそ

しらつしをたまはあしゆやさしとよの世
を文よむへと残おのつき志いそしきちれは激年
ぬしもいつなれらしきうとひやくりてその
經緯のさし絶えをみするに大家とあるは甚はやきな
るかはまたむ人をいつるやむといひ契るによませ
ものらやすりて確のことうしほとの足られたる
稀なるはしこ浜の神經緯の海上激年大人錦
縄とある残して激年ての人をいつのさの蛇たけ
あるくてのちにおほやき郵家に飛ひたすかしも

ふかしむ人たらぬさしあらさるべし御かた
大とのあかしそゑ世にさ紙にくるゝやうと
いひそてたふくちつゝさて鬼ともそむものひゐ
ゐらしめ給ひと謹んで作りまゝし拙きつゝさぎ海
ちれハおの紀いうちねふりたまのとくくと思ふ
ましく作ともといひてやくゝやさき川ところの
ほのよもくろ紀とやその尤もと心ひくきちさ
あさ川ゑく形きことやとはおもへと和学の
志よもとてふる川みつさらてあるある紙あひ

志川る人くよわの綾のことはしめる思へし
あとはみくはるべしなのといひおこせらるゝ
まつりしおのつのしくなおもしやさ此篇とを
冬ゐ里女さる程をこのそのしきてる紙よと
ほらふ人ゝにもあるとちる貴くの

明治十八年十月

江葉しるす

東京大家十四家集評論辨

鈴木弘恭述

明治十六年三月ばかりいかなるゆゑかありけむ徳大寺宮内卿より現今東京にある人十四人に近きころよめる歌三十首づゝを短册にかきてよとありしかばおの〳〵かきてまゐらせし歌どものおのづから世にもれきこえけるを平井元滿といふ人のとりあつめて一册とし東京大家十四家集と名づけてすり巻にせしを海上胤平といふ人の見てかの集の歌どもの中をこれかれ批難し十四家集評論となづけてまたすり巻にせるがいできにけりさいつころ教へ子なる土岐某がそのふみ携へ來りて見せければとりあへずひとわたりよみみるにその難し論せることゞもそらおのがわたくしのこゝろに

思ふまゝをいひたてたるのみにて何の例證によれりともあらず
たゞ世には人もなげにわれたけうのゝしりされど大かたはうけが
たきことのみにていふにもたらぬものなりけりされバこそ作者た
ちもさばかりをさなきしわざをまめやかにきゝとがめむはなか〳〵
におとなしからずかへりて人わらへにもなりぬべければとてうち
すておかるらめどさてはむげにものしらぬ人また初學びのともが
らなどのかの評論を見てまことにさることゝおもひあやまらむは
道のためいさゝかさまたげなしともいふべからずかつは評論者が
序文にいへることにもおのれまたあやまりなしとにはあらねど立
鳥の思ひすぐさで集のうちにつらなる人はさらにもいはず天の下
の歌人そのことわりをあげつらひてよとさへあるをも見流し聞流
しもたしてのみあらむにはいよ〳〵おのれがいひつるそのあやま
りなしとおもひて世をつくすらむもさすがにいとほしければあな
がちに事このみなる人の言葉がたきになりなむはおのにしくもあ
らねどやむことをえず作者たちに代りて論者がこゝろえたがへた
るふし〳〵をわきまへてかの評論見む人のまどひなからしめむと
おもふばかりの老婆心になんそはつぎ〳〵いへることどもを公け
に平らかなる心もて靜にあぢもひ見ばおのれがいふことのしひで
となからぬはおのづからしらるべくなむ

○評論の序文の中

歌よまむとならば萬葉集のうちすゞされよきをこそ倣ふべけれ古
今集は玉にして瑕あるものなりされど萬葉集をもなるゝことを
からねどうるはしきおもかげ見えて捨べきものの少くとるべきもの
多し後撰集こなた萬葉集の世にあるをやしらざりけむくたちにく

たちては古今集だにも見ざるものにや歌のさまめゝしきのみかはやゝいやしげになりにたるを云云

○辨云これ百年あまりむかし眞淵翁などのいはれしことをかつ〴〵くちまねせるなれどそのいひざまよろしからねは翁の意にもたがへりそれはさておき今の世にしてかゝることいふはいたづらに高尚なることをいひて人ぎゝを驚かさむとするものにてその學びのほどもおしはかられてかへりて心おとりのせらるゝなりさるは眞淵翁のころは世の歌さまいたく後の世のてぶりにのみなりもてゝ萬葉集はさらにもいはず古今集以下八代集だによくもたどらずわづかに草菴集三玉集などいふ後のものをのみ手本として古き詞めづらしきてにをはなどは制禁してかなつゝなどの結びは宗匠家のゆるしなきほどはいふまじきことぞなどさへいひあへる世なりければ翁のこれをうれたみはじめて古へぶりにひきかへされたるはいとも〳〵いみじき此道のいさをにはありけりされど殊に萬葉集に心をつくされしは詠歌のうへのみにはあらず御國の上つ代の事をしるべきは古き世の歌をしるよりさきなるものなしと見とめられしよりもはら古へ學びのためにものせられしなりけりされば歌よまんには藤原奈良の御時より花山一條の御時までの歌をとはし見てその世々にのぼりくだりて心のひくかたにつきて學ぶべしと弟子たちにさとされたりけりこれぞたゞしき此道のをしへにはありけるさて萬葉集は古事記日本紀の歌にさしつぎて上つ代の歌をあつめ人麻呂赤人の歌もこれにあれば歌の集のみなもとゝしてあふぎたふとぶべきはいふもさらなりされど奈

良の朝までは大かた世のありさまも人のこゝろこと葉もよろづ平安の京このかたとはいたくことなるところはおほかれば後の世の人いかにおもふともかの代の心詞をうまくうつしまねばんことはなしえがたくこづかにこゝかしこ古言をとりまじへておろ〳〵くちまねするのみなれば大かたはみなつくりもののにせ物にてまことの心をのぶる歌はいでくべからざれば萬葉集は中にもよき歌をえらびてそれにならんことのよきはいふもおろかなれどまことはいふべくしておこなふべからざるわざなりしかいむゞをちなく心ひくしとおとしめいふらんかさらばさいふ人おのがよみいづる歌のこと〴〵く萬葉集の心詞なりやいかゞみづからかへり見ばよもさはおもふまじきをやさるをなほおのれは萬葉集はよき歌のすがたをまねびえた

りといひおもひてあるらんかさてはいよ〳〵笑ふべし

ついでにいふ今の世に詩作る人のもし詩は陶淵明謝靈運などこそあれ唐人にいたりてはその調下れりなどいひまた手かく人の書は張索二王などこそあれ唐より以下はその風いやしげなり畫は呉道子巨勢金岡にかぎれりその後のものは見るに足らずなどいはゞ世の人いかゞきくらんいま論者が歌は萬葉集の中なるすがたのよき歌こそあれ古今集は瑕あり後撰集以後はいやしげなりなどいふは大かたのたぐひにぞあるべき

古今集は玉にして瑕あるものなりとはいかなるところをさして瑕といへるにかそはしられねど萬葉集のうちすがたのよきをこそ倣ふべけれといへば萬葉集にもよからぬ歌のあるなり

さらばこれもまた玉にして瑕あるものなるらむをなど古今集をのみ瑕ありとはいひけむ

後撰集よりあなた萬葉集の世にあることをしらざりけむ云云とは何事ぞや天暦の御時梨壺の五人にみことのりして萬葉集に點をくはへしめ給ふこれを古點といふその梨壺の五人すなはち後撰集の撰者なりその後も此集に點を加へたる人つぎ〳〵ありて次點新點などいひ來れりいかで後撰集よりこなたは萬葉集の世にあることをしらずといはむされどもその世の人は萬葉集をよみときたりともその詞をくちまねしておのれが歌をよみいづることはせざりしなりそも〳〵古へ今は歌はさまをくはしく論じたるは富士谷成章の歌袋村田春海の歌語また本居大平に答ふる書石原正明が年々隨筆等にのこるくまなくいひてあれぞかの書どもを見てしるべし論者がいへることくかたおもむきに萬葉集にのみならふべしといふは歌の事よくもしらぬひがこゝろえなりかし

景樹が氏の名におへる香川のあさましき心のにごりより今のいやしきさまにはおし流され云云

○辨云此十四家集は景樹にあづかれることなきを何ゆゑにかくゆくりなくひきいでゝにくみのゝしるらむいといぶかしよしや此作者は中に景樹の歌さまをしたひその流れをくむ人のありとも此集は歌は過ぎにし景樹のしりたることにはあらずかし悦目抄にも父堪能なりといへども子かならずしもその心をつがず師匠風情をえたれども弟子またその風情をうつすことなしと見えたるがごとくおのづからその人々のくちつきはあるものなる

をよしや弟子は歌はよからずとてその師をさへにそしるはい
とあるまじきことにこそ
今のよがにては後の日外國の人にも歌學びするものゝいでゝさ
くしりいふもはかりしられずそはうれふべきをならずや
○辨云これあまりにも笑ふにさへざるをなほかしもし外國の人
の歌學びして此十四家集の歌をあしといはんともなにのくる
しきをかあらん何のうれふべきをかあらんさばかりにも歌の
心詞きゝわきなむ外國人のいでこんこそねがはしかるべけれ
あまりにつきなき杞人の憂にもあるかな
こゝまでは論者が序文にいへるしとのうけがさきふし〳〵
を辨せしなり

東京大家十四家集

○評論云大家とあるは大きなる家に住人をいへるにや歌をたく
みによめる人をさしていへるにや歌集にかゝる名をつけざる
例きかねは心得がたし
○辨云これ此集の作者たちを嘲(アザケ)りいへる戯れ言なることしるけ
ればまめだちて辨を費やすまでもあらず此大家とあるを大き
なる家にすむ人をいへるにやなどいはんは評論のすり巻に海
上胤平大人編輯とあるを見て胤平といふ人はいかばかり大き
なる人にかといはむかおとし

春之部

○評論云冬の歌をあげて春の部とせしはものしらぬささならずや

○辨云今の新年一月はいまだ冬の季節なることをされかはあらざらんされど四季戀雑と次第をたてゝ歌集をあまんには年の始の歌を冬の部の歳暮の末には載すべくもあらざされば巻頭なる春の部のはじめに擧げさるぞ穏當なるべき

朝賀　　　　美静

つかさ人うちつらなりて馬車ののぼる雲井の年のはつ空

○評論云此歌よみ得たりとやおのれおろかなる心もてことあげいはむには初句官人うちつらなりてとあるより四句のぼる雲井とかゝりたらむにはこともなげに聞ゆれど三句馬車といふことありてはおだやかならず下句雲井にのぼるけふの初空といふべきところなるべし

○辨云此歌官人が馬車にのりてうちつらなりてのぼる雲井といへるこゝろ聞えぬにはあらねどつゞけざますこしくだけさるやうなれば論者がおだやかならずといへるもさることならんか○下の句年の初空をけふの初空としては新年の意たしかならざればそはもとのまゝにてあるべし

一月　　　　眞頼

あら玉の年のはじめは冬なれどあやなく春と思ひけるかな

○評論云此歌いとをさなくもよめるものかな春とおもはんには梅のさきたりとか霞のたつとか何かあたりどころなくては叶ふべからず夏なれど秋と思はんには風の涼しきなどこそいふべけれ眞淵翁が「をつくばも遠つあしをも霞むなりねこし山こし春やきつらむ諸平うしが「天つ風花に吹なそわたつみの浪よりおくも春はきつらむかくよめりおれらによりてそのことを

りをしるべし諺に花を得むとならばまづ種をとれといへり心のたねよからぬには言葉の花も色なかるべし

○辨云いとをさなくよめるものかなといへる評語のそは後にいふべし春とおもはんには梅のさきたりとか霞のたつとか何かあたりどころなくては叶ふべからずといへるはいかゞそのあたり所は年のはじめは冬なれど、たしかにあるをや此歌前にもいへる如く今は新年一月は猶冬の内なるぞさるそはおもはでむかしの心ならひにあたらしき年としいへばやがて春なりとおもはるゝそかなといへるにて心詞かくれたる所もなくありのまゝによく聞えたりさるを春とおもはんにはかならず梅のさきたりとか霞はたつとか何とかいはざれば叶はず秋とおもはんには風の涼しきとかならずいふべきものとのみおもへるはあまりにかたくなゝる心ならずやたとひ古人のくちまねにもせよ歌は萬葉集のうちすがたのよきをこそならふべけれ古今集は玉にして瑕ありなどあま雲たなびくばかり高きそいへる言葉の下よりいかでかくふもとのちりひぢよりもひくきこゝろのほどをあらはしけむさてまた眞淵翁と諸平とが立春の歌は何ゆゑに引出たるにかこゝろえられずなんおほよそ歌の難をいふべきは語格のたがへる。てにをはのとゝのはざる。こゝろのとほりて聞えざる。上下のうちあはぬ。などをば定かにさして難ずべく猶疑はしきは證例をも引きて論ずべきしとなるを此論者は歌を難ずるすぢをばむげにしらぬ人にておのがこゝろゆかぬをも解しえぬをもあはせてみだりに。をさなし。はたらきなし。おぼつかなきいひさまなり。いまひときざみとおもはる。優

ならず。いやしげにてみやびならず。きゝぐるし。つたなし。このましからず。うべなひがたし。わらはのよみたるやうなり。おもしろげなし。などいへるハ畢竟なにの證據も無けれバ論者が心にをさなしはたらきなしと思へるがかへりてまごゝろをすなほにいひ出たるにて歌の本意ならむもしるべからず但し歌合の判詞などにハさるさまに評しいへるもつねのことなれどそれとりさてゝいふべき難もあらねど番ひたる歌との勝負のうへにつきて貶しめいへるにてうちまかせたる難にハあらざれバ歌合に負けたるが勅撰の集に入りたるも少からざるさてまた評論の中に眞淵翁と諸平とが歌を引きてかくあるべしとやうにいひ殊に腹を捧ぐべきほこりかにおのれが歌を擧げてかくよむべしといへるにいたりてハあまりに物ぐるほしきしわざとぞいはましまた眞淵翁よりこのかた近き世にその名聞えたる歌人も多かるをおきて諸平が歌をのみ多く擧げたるを見れバ此論者ハ諸平が弟子にてやあるらむさらバなが佛たふとぶ心に諸平のをのみよしと思へるにやこれもまたかたくなゝる一ッといはむもひがことにハあらざるべしかにかくに學問のすぢハ古へにもたちまさりて年月にひらけゆくなる今の大御代なるにまだしかりつる時のごとく覺束なくうきたることのみいひてあらむハあぢきなくいとほしきわざなりかしこハ此一歌の評のうへにのみいふにハあらず此集評論のあるかぎりをとほすべていふなり

附ていふ此辨ハ初めにもいへるが如く事を好みてするわざにハあらず初學の輩の爲にやむことをえずして評論のあや

まれるふし〳〵をことはるのみの本旨なれば評語の中に引きいでざる諸平胤平その外の人々の歌はすべて評するにおよばざれば思ふところのあればなりけり見る人あやしむことなかれ

元日によみ侍りける　　冬道

鶴のまふ千代田の御城の松のうへに富士の高嶺をあふぐけふ哉

○評論云此歌ことばをならべたるまでにてはたらきなしいまひときざみあらはやある人のよめる「富士のねを大城のうへに見さくればうべこそ國の鎮なりけれかくてこそ城といひたる詮もありなめ

○辨云評語のそは前にくはしくわきまへおきたればさらにいはず此歌うち見たるまゝをいひたるにてよしとはあしとはきく人の心になるべけれどもかくさまにいへる歌古へよりおほし「田子の浦ゆうちいでゝ見ればましろにぞ富士の高根に雪はふりけるといへるをも此論者ははたらきなしといふべくやこれかけていはんもさやをきやうにていとかしこきあれどとながら富士の山をうち見たる歌につきてふとおもひよぎるまゝに戯れにあるそのまゝ或人の歌は或人の歌冬道ぬしの歌は冬道ぬしの歌にてあひあづかるそにはあらざるべし

新年柳　　美静

たのしさは年たもつ空青柳の糸も日かげものびまさりつゝ

○評論云巻のはじめに去年の一月より此方よみ出たる得意の歌云云とあれば新年は大陽暦の冬なるべし冬の題にて青柳をよめるはいかゞ青柳は春のものならずやさて又日かげのゝびま

さりつゝとあるこれもそらごとならむはやく弘訓が「春は日もし
だり柳のいとたるゝころよりいとゞながくなりけりとよめる
歌すりものに見えたりされどいひがひなし
○辨云季節はさることならめど新らしき年のはじめとなりぬれ
ばおのづから人の心ものどやかになりてたゞひと夜ふた夜の
へだてに日かげものびたらんこゝちのせらるゝがなべての人の
情なりその情をのぶるが歌なりされば新年といふ題ならんに
はたゞ一年のはじめの心もて歌はよむべし○また青柳はもと
は青きをめづるよりの名なれど古き歌どもにも柳といふべき
を青柳といへるも多かりさればとて冬の枯柳を青柳とはいふべ
くもあらねどすでに新年になりては春の心にとりなしていは
むもあながち難にはあらざるべし○又日かげののびまさりつ

ゝとあるをそらごとなりといへどそは前にもいへる新年の人
情を柳の糸の縁に引かれていはれたるまでのことなるべけれ
ど又論者がこちたきまでいふなる暦日のうへよりいはんにも
冬至よりは糸すぢばかりづゝ日影ののぶとはいにしへよりい
ひ來れることにてまことにさるべきさまなるべければ冬至より十
日あまりをへたる新年ならんにはそらごとともいひ難かるべし
これあまりに無用の長談義にてされながらたゞにをかしけれど
も評論にともすれば季節のことをいへるがかたはらいたさに戯
れがてらにはなんさてまたはやく弘訓が「春は日も云云とある歌
すなるものに見えたればいひがひなしといへる弘訓とはいかな
る人にかしられねど古へ人(びと)にはきゝもおよばねば近き比の伊勢
人足代氏などのこにもやあらんさばかりの人の歌をあまねく

世の人のきゝしるべきものならめやまことその歌もことづかに心詞のかよへるのみなりよしやまさくおなじかりともそれはさま〴〵暗合せるものなるべければいかゞはせんそも〳〵歌の心詞上下みながらおなじきをいとふべきは八代集をはじめ歌人とあらむもの、かならずしらではえあるまじき集や物語やのかぎりはさることなれどその外はさとび先だちの歌なりともそ〳〵くしりうべきものならねばおのれひとりがしりさりとてさのことがむべきをはあらずかし

待春　眞頼

むつきたていよ〳〵寒くなりぬれも春まつなろにまつとしな〳〵

○評論云寒くなりぬれば春待外に待こともなしとはおぼつかなきいひさまならずやかくては寒くならむには待るゝものゝ多くあるやうにきこえていかゞ四句を替さらむうへに結句春ぞまさるゝといはではことわり立がたし

○辨云これは例の大陽暦によれる歌にて昔はむつきのきぬればやがて春もたち寒さもゆるびゆくを今はむ月のきてより寒(カン)にも入りていよ〳〵寒くなりゆけばいかではやく春のたちてあたゝかになれかしとその春をまつより外にはまつこともなしといへるにて一月になりてよりさらに春のみまさるゝ心をいへるにてよく聞えたりさるを寒くならむにはまさるゝ物の多くあるやうに聞えていかゞとは何事をいへるにか難ぜる言葉こそいとも〳〵おぼつかなきいひざまなりけれ

禁苑春來早　重嶺

まゐたゐつ大内山の春風によもの民くさなびきそむらん

○評論云春風はおほかた東の方より吹くものにいへり大内山とあればそれより西の方へ吹くなるべしされば四方の民草なびくとはいふべからず四方といはで民草とのみあらばやさしなくてはことたり立かたし

○辨云大内山とは禁苑によそへていひ春風はそのあたりよりふく風をいへるなり春風を東風といふはつねのことなれど此歌にてはさのみ方角にかゝはるべきにあらざるを春風としいへば必東の方より吹くことをいふにかぎれりとおもへるはおろかなり「谷風にとくる氷のひまことにうちいつる浪や春の初花その外春風の歌おほかれどあながち方角にのみかゝはりたることなし大内山にうちそめたる春風に四方の民草なびくといへるいさゝか難なし

早春鶯

正風

山かげはをのゝしの原霜とけてぬるゝ日かげに鶯の鳴く

○評論云初句山かげとあるはあまりものなり外の句にかへばや四句日かげのかげ同じ詞二ツあまりてそもうるさし胤平ならば「霜とくる小野のしの原さけくきは朝日にぬれて鶯のなくともいふべけきとよみ得たりとおはあらを

○辨云山陰の小野などはのどかに鶯のなくべき場所を形容してもいふべく又はさまぐ〜さるところの實景につきてもうちいでるべきをあまりものとはいかでかいはんまし山陰のかげと日影のかげとはもとより異なればあながちに同じ詞とはいふべくもあらずまして同語をきらふはいと後の世の事なり論者が序文にいへるごとく萬葉集に倣はゞ同字同語をもさくべきにあ

らぞそも〱歌ハ見る物聞くものにつけていひ出るものなれバ古へハ心をよせむ人ハさばかりさゝやかなることにかゝハるべきにハあらねど題詠をのみもはらとせる後世風の心にハうるさしといはんもさることならんかしかハあれど此論者が序文にいへる詞にハふさハしからぬ難にこそ

禁中早春　　　　　　　　　　　　　美　静

さ庭〱ともなるみふれ河竹ハそよりさわふ春風やなし

○評論云かハ竹にさら〱とこさるハ秋冬の風ならバこそあらめ春風にハふさはしからぞそハしばらくおきて河竹とかけるハ誤ならむ元漢國より來りしものなれば漢竹とこそ書べけき天漢又神漢など書てあまのかハとよめる此たぐひなりといへり

○辨云さら〱とかさるハ河竹の縁もていへるなり春風なりとも竹にはふれなバさら〱とおとのせざらんやハさるを秋冬の風にのこといへるハあぢきなし又河竹と書るを誤ならんといへどいにしへより書き來れる借字といふものにて和名抄にも箸竹加波多計本朝式用河竹二字とあれバ誤とハいふべからぞ古へより御國にてハ音にも訓にも文字の義にかゝはらず借字を用ゐるならひめづらしからぞ萬葉集などにハ殊に多きを見しらぞやあるらむ

初春松　　　　　　　　　　　　　　資　之

春の日のさすより松の雪おちて千世の色とそあらハれにけれ

○評論云二句さすよりとあるハ今一きざみとおもはるおなじくハのぼればとせむかたちまさるべくや

○辨云此二句を今ひときざみとおもへるハはじめにもいへる論

者が心におもへるなれどさをよりて歌の心ハ聞えさりまさのほれバとしても聞ゆれどなにはかりけさがひもなくてひときざみまさりても聞えぬなん

春風解氷　　豊頴

谷風にとけてたゞよふうすらひや流れし冬のゆくへたづぬる

○評論云二句うきてとあるハうすらひの水底よりうかひ出さるやうに聞えてをさなし此詞なくてされり眞淵翁かよめる「春風に氷流るゝ汀にハ水の心のゆくもみえけりかやうなるふしにいはゝや

○辨云うきてといへるを水底よりうかび出さるやうに聞ゆとハいかなるひが耳にや。うきてたゞよふ。うきて流るゝ。などハ花紅葉霞霧などにはねにいふ詞なるをやまさ。うき雲。うき舟。うき橋。

などの類もみな水底よりうかび出るにハあらざまさ此詞なくて足れりといへどさてハを足らざうきてたゞよふとある詞うごくべきにあらぬ

餘寒霜　　香稈

山かげのあしたの庭は霜はしらたちかへりても寒き春かな

○評論云初句山かけといふ詞あまりものなりいはでもあるべし此歌「春をあさみいまはさ庭の霜柱たちかへりてもさゆるころ哉かくいはゝとおもへと霜柱俗なるへし

○辨云山陰のあしたの庭ハその場所をさしそ形容せるか又ハ實景なるかハよしハ前の早春鶯の歌にもいへる如くなるべけれど殊に此山陰といふ詞ハ霜柱のたつにもよしありてよそよりも寒きさまの思ひやられてあまりものにハあらざ又霜柱を俗

なるべしといへどはやく新撰六帖に光俊「谷深き岩屋にたてる霜柱たが冬こもるすみかなるらむと見えたるをや

餘寒河　　　　　重嶺

谷河は春は冬にやたちかへるいづらきのふの波のはつ花

○評論云いづらきのふの波の初花と結びたるには三句過去にいはでは叶ふべからず

○辨云いづらきのふといへるは今日の詞なれば三ノ句過去にはいふべくもあらずさて一首の意はコノホド春ノキテ谷川ニ波ノ初花モウナ出タリシヲ今日見レバ又氷トヂタリサテハ再ビ冬ニ立カヘリタルニヤ昨日マデ見エシ波ノ初花ハイヅコニアルカ少シモ見エヌといへるにて子細なく聞えたり

春雪　　　　　眞頼

たちいでゝ見るまゝ袖にそなほみだり風寒みして雪はぬるゝは

○評論云風の寒ければ見る心にはならぬとやかくいひては雪におのが情のあさ〳〵しきを述たるまでにて春雪の題を得てよみたる詮もなかるべし源長継「かきくらしそらは同じ空ながら雨になりゆく春のあは雪此歌そのさまを得たり古人のみやびなるをしるべし又「いざさらば雪見にころぶところまでとはせをいへりしは情のふかきをしるべし

○辨云此歌初句のたちいでゝといふをいかゞ見おとしてたゞちに風の寒ければ見る心にはならぬとやとは難じけむさるはよしや雪をめづる心はありともいさゝ風のさえさらんにはたちもいでずて家の内に火桶などかきなでつゝながむるもまたよのつねのみやびなるべしかならず外にいでゝ見るにかぎり

さろをにはあらざさるを風の寒からぬゆゑにさちいでゝまでも見る心になりぬといへるなりかいなでのくちつきならば必春の雪とか沫雪とかいひて題に叶へぬべきを風寒からぬにて春の意を聞かせさるがいとをかしきなりさるを眼目の詞にあゝろつかざるはいとあぢきなしさて又源長継といへる人の歌は沫雪の雨になりゆくさまをいへるにて見ると見ざるとにはあづからぬをなる哉なにのゆゑにあゝに引いでさるにかいとよしなしはせをの發句はあるが中にも世の人口に膾炙せるものなるをめげらしげに俳諧の發句までを引出たるはいかなる心にかいぶかし

梅　　美静

見る人を心はおくみと見よかし春にさきたる河梅は色香は

○評論云初句優ならを二句心のおくにとある此おくといふをまをて聞ゆ心にとめよかしといふべきを文字たらねばとてかくいへるにや結句色は見るべけれど香は見えざるものなりされば初句にうち合かさし

○辨云見る人といへるをは昔も今もつねにいふ詞にてめづらしからぬをいかて優ならをとは難しけむ「見る人もなき山里のさくら花云云「見る人もなくてちをぬるおく山の云云なといくらもあるべし又心のおくとあるも心の底などいふ意なればおひてとがむべきにもあらざ結句の難はをにいそれなし初句の見る人とは梅を見る人をいふなを結句はその見る人の心のおくに色香をとめよといへるにて色香を見る人といふにはあらざ

野亭梅　　清綱

里とほき野中の菴も梅の花さける隣はある世なりけり

評論なし

山家梅　眞頼

わかやどはあまりふ山の奥なれど梅か香とめてとふ人もなし

○評論云二句はいへるあまりとあるはこゝはいふべき詞かは歌の意もをさなし山の奥なれど梅さけば人もとひこしなどいふでは梅の歌とてよみ出さる詮もなからん前に見えさる春雪の歌も此歌もおなかさ似さる姿にてつさなし景樹か「あまりにも春の日かけの長ければ「あまりにも夕立雲の早ければ「あまりにも月のくましなければ」などよめるこはいつれも叶はぬをかゝるふしに心とめて詞も意もとるましきをとりしらべも習ふまできをならへるものにや

○辨云あまりとあるはこゝはいふべき詞かはとはいかにこゝろえたるにか景樹の歌に此詞あるを多くあげていづれも叶はぬとのへれどそのかなはぬよしをいはねば例のたしかならぬぞそも〱あまりとは物事の尋常に過ぎさるをいふ詞にて古歌にも多ければ例を擧るまでもなし又山の奥なれど梅さけば人もとひこしなどいはでは梅の歌とてよみ出さる詮なからんといへるも此歌の意を解しえぬよりのひがことなり大かたの山里ならば梅見にくる人もあるべきを尋常ならぬみやまの里なれば梅か香をとめてとふ人もなき事よとのへるにてこれぞあまりにといふ詞の出るところにはあるなかしてあさら梅の盛をひとり見ることよといふ餘情もこもれり何かは梅の歌の詮なしといはん大かた此論者のをさなしなど評せる歌どもを見こさ

をにこなをなをにして殊に餘韻あるが多し論者は餘韻餘情な
どいふをはふつにあらぬにや

禁中梅　　　　　　　　　　　　資之

梅つぼのうゑのさかりになりぬらん大宮人の袖かをるなり

○評論云二句梅やとして三句なりぬらしといはんかまさるべくや

○辨云もとのまゝにてよし梅つぼの梅といはんからには梅や‖と
おほかたは疑はんにきものとたしかにさしさるかさまさりたらむ

月前梅　　　　　　　　　　　　實愛

さやかなる梅のにほひにはをかれて朧月夜をふかしつる哉

○評論云四五句いやしげにてみやびならず

○辨云評語のそれもとめにくもしくきこきまへおきたればいまさ
らにいふにもたらねど此歌の四五の句何のいやしげにみやび
ならざるをかならむ梅の匂ひにあくがれていねもやらで朧月
をふかしつらむはいやしからずみやびさるをさびなるべ
きものをやいともいぶかしき難なりかし

梅薫夜風　　　　　　　　　　　　粲

をろゝまて柳に見えし春風は梅のにほひになりたるかな

○評論云結句けるかなとある此けるかなは景樹が桂園一枝とい
ふ巻の中に見えたるけるかなとおなじけるかなにてかなしぬ
けるかななるべしけるかなとどめむは歎きの意を含みて
いふべきものぞ例せいはゞ古今集に「さを山のはゝその色はう
すけれど秋はふかくもなりにけるかな「君かうゑしひと村薄虫

の音のしげき野邊ともなりにける哉「おしてるや難波のみつにやくしほのからくもわれは老にけるかな「夢とこそいふべかりけれ世の中はうつゝあるものとおもひけるかなこれによりてその意をさとるべし

○辨云けるかなといへる辭の咏歎なることをたれかしらざらむ景樹が桂園一枝といふ巻の中に見えさるけるかなにてかなしぬけるかなとは何事をいへるにかその叶はぬゆゑをいはねば心得られずさて此歌のけるかなは咏歎の辭なることもとよりにてそのこゝろは日のくるゝまでは柳のえだのうごきて春風の吹くが見えしを日のくれぬれば柳のうごくは見えずなりて春風は梅が香をのみひまなくおくりきてにほふことかなアとこゝろに感じたるてにをはなり遠鏡の例などもていはゞ餘情にサテ〳〵ヨイカヲリヂヤナアなどゝかきもそふべきにこそさて又評論にけるかなとぢめんには歎きの意を含みていふべきものぞといひて古今集の歌をあげこれによりてその意をさとるべしなどいへるがかたはらいたきのみならず歎きの意を含みたるものぞといへるも猶おぼつかなきいひざまなりいでさらば此辭をくはしくときさとしてむ論者が歎きの意を含むと大かたにいへるはいかなるこゝろにかしられねど此なげきとは長息にて息の長くつかるゝことなりされば詠歎歎息等の字を用ゐすべて見る物聞く物そのほか何事にもあれ心に深く感ずる時うちいでらるゝ聲をなげきの辭といふなり今俗にいふ悲歎のうへのみには限らずさてけるかなといひつゞくる歎辭のけるは來(ケル)の意かなは咏歎にてなりにけるかなとはナリ

テキタコトヂヤナアと心に深く感じていへる辞にて悲歎のみにはあらずさて又此かなといへる歎辞を萬葉集のころまではかもといひてかなといへることなく古今集よりこなたは多くかなとのみいひてかもといへるは少し評論に古今集の歌を四首あげたれば今は萬葉集なるをおもひ出るまゝに四首引きいづれこれらをもかよはし見て何事にもあれ心に感じたる詠歎なることをさとるべし

「うちのぼるさほの河原の青柳は今ははるへとなりにけるかも

「岩そゝくたるみのうへの早蕨のもえ出る春になりにけるかも

「あさみどり染かけたりと見るまでに春の柳はもえにけるかも

「むこかもの水をそやとかあかあまのあかくそゝきにぬれにけるかも

因にいふ景樹はけるかなといへる歌を多くよめりとて在し世にも京師にたりてけるかな宗匠とあだ名せりとか又近き比江戸なる井上文雄はなりけりといへる歌おほくよめりとて小林歌城が戯れに「歌みれそおなじてにをはよまれけるこれもなりけりこれもなりけりといひてわらひしとぞさることは昔より上手のうへにもあることにてなかなかにそかしかけていとむつかしこかれど貫之の君はべらなりといふことをいとおほくよみたれはべらなり歌仙などもいひてましやあなかしこかしこ

名所梅　　冬　道

川添をきとそのなつかし記鎌倉の雪の下道梅がゝぞする

○評論云初句その外さゝぐるしくてつたなき極なり鎌倉俄に出て雪の下道も縁なし俗にもてあそぶ天狗俳諧といふもののやうなり雪の下といへるはかしこの地名をよめるなめりされ

聞えがたし雪の下道は雪に埋れたる道をいふなりそこに梅の薫るとはおぼつかなし胤平ならば「鎌倉や雪の下道あらはれて霞む里には梅かゝそふるともいふべけれどよみえたりとにはあらず

○辨云難はいへることゞも一ツもあたらずまづ初句を聞ぐるしといへど萬葉集に「つねやまずかよひし君がつかひこず今はあはじとたゆたひぬらし「つねならぬ道の長手をくれぐくれどいかにかゆかむかれひはなしになどあり一首の意はつねにきて見れど物のなつかしき鎌倉のさとの雪の下に梅が香のしてことになつかしといへるなりさるは頼朝卿よりこのかた年久しく賑ひたる所なればおのづからなつかしきかたもあらぬべしそを名所の題によみ出たるなれば俄にいでたりなどはいかでいふべきさてそこに雪の下といふ所あればやがて鎌倉の雪の下道とはいひつゞけたるなりさるをされ聞えず雪の下道とは雪に埋れたる道をいふなりとはあまりにあひたる難ならずやかばかりたしかに聞えたる歌を鎌倉俄に出て雪の下道も縁なし天狗俳諧のやうなりとはいかなる耳ぞも

梅花誰家　　實政

すむ人はたそかれ時の梅の花ちるをしるはなふ笛の音ぞする

○評論云此歌いはゆる落梅曲におもひよられてよめるなるべし一二句住人はたそかれにまたるはいやしげにて好ましからず四句ちる下庵もくるし眞淵翁がよめる「とふ人の笛も聞えて垣の内に梅ちる風のおもしろきかなこれはやすらかに聞えていとみやびあり

○辨云梅花誰家といへる題の意をとりなしてよむ人はたそかれ時といひかけたる秀句さのみいやしげなりとも聞えざれども〳〵秀句はむかしの歌にも多くありて心きゝ詞つゞきて一首そえあるものなれば後の世にはまゝ好みよむものも多くなりきつゝつひには五首の中三首は秀句ある歌のやうになりぬれば六百番歌合の判にも秀句によりて勝なんとは歌の道見ぐるしくやなりぬらんとはいはれきされどとてよからんをばいみきらふべきにはあらざるを近き比なま〳〵の歌よみが秀句とざまいへばひたぶらいやしげなるものゝやうに心得たるはなか〳〵にひがことなり

霞知春　豊穎

春そともまたくみしらぬ淺澤の水のけふりのすゑ霞むなり

○評論云二句くみしらぬとあるは優ならずくみもしられぬなどいふべき詞なるをまたといふはいとまふしくてかくよめるはやくちをし

○辨云くみしる。くみしらぬなどはつねにいふ詞なるをいかで優ならずとは難じけむさてくみもしられぬといひては。も文字初句にさしあひてきゝよからず

朝霞　實政

朝日さす高根のしらゆきえぬらむうすむらさきの霞たなびき

稲荷詣　清綱

いなり山杉の下道ぬりはへてもたかふ袖に春風ぞふく

此二首評論なし

里鶯　香稈

さと人はみやこにいでし大原の春をまもれる鶯の聲

○評論云四句春をまもれるとはかしこがりていへるなめれどうべなひかたし

○辨云此評語いかなるこゝろとも聞こえがたかれどおしむかりに俚言にうつしみんにはリコウブリテイヒタノダラウガオレハ不承知ダといへるこゝろにや人のよめる歌を批判して仮初ならずをり巻にして世に公けにせんにさる難のいひざまやはあるべき

竹鶯　葆光

いつしかとまちまし窓のくれ竹にそとや鶯けさぞなくなる

評論なし

夕鶯　冬道

鶯はおのがさへづりおもしろみ日のくれゆくをもしらずやあるらむ

○評論云聞えてはあれどわらはのよみたるやうなり

○辨云此歌鶯の長き日の暮るまでもさへづるさまをいとをかしくいひえてかいなでならぬくちつきと聞ゆるをわらはのよみたるやうなりとはいかでいひけむいぶかしついでにいふ歌はをさなかれと俊恵法師もいはれてあながちにたくみをもとめずおもひてことあるふしをまうけずつくりかさらずしておのづから心のまことをうしなはずこそよみたらんやうならむこそねがはしかるべけれされどしかよみいでんことはかたしともかたきことなるべし

曉鶯　粲

月かげはきえなむとする花のうへにはなれいでたる鶯の聲

○評論云月は消なむとしたる花の上に鶯の聲にほひいでたりと
やもたらきなくて初句二句はなきものなり下に曉の意あらま
ほし二句る‖文字四句る‖文字かしまし
○辨云初句二句もなれものなりとはいかに月影のきえなむとす
るはすなはち曉の空のさまにて題の意なりされば下にふたゝ
び曉の意をいふべくもあらじ二句る文字四句る文字かしましと
はいかなるこゝろにかあらむかしましとは俚言にヤカマシといへるをな
ればかゝるところにいふべき詞ともおぼえずそはともあれこは二
の句のをはりと四の句のをはりとにる文字ありて耳にたつとの
意なりやされど此二ツのる文字耳にたちてかしましきばかりは
聞えず昔も今もつねにいふ詞づかひにて何の子細もなし例な
ど引出るまでもあらねどおもひ出るまゝに二つ三つかきつく

金葉集
「風ふけもなミのあやおる‖池みつにいとひきそふる‖きしの青柳
新古今
「春日野のしたもえしたる‖草のうへにつれなく見ゆる‖春の沫雪
新勅撰
「いつしかとけふふりそむる‖春雨にいろつきわたる‖野邊の若草
猶いくらもあるを書よまぬ耳にはきゝくるしく聞ゆるにや但
しは歌の抄物といふものに歌の病などいへることありそれら
になづめるにや

雨中鶯　　資之

春雨のぬる日ふたなく鶯は友にとはるゝこゝちこそすれ
○評論云初句春雨とあるこはあし雪ともいはるれば動きて詮な
し二句ふる日に來鳴くとはをさなきいひさまなり下句友にと
はるゝこゝちをとは聞えされと春雨のふる日とあながちにい
へるはいかにぞや

○辨云これも又むげに歌の趣きをしらぬしひごとなり先づこれ雨中鶯といへる題なれば春雨のふる日といへるなりといはゞことつきぬべしさて此歌のこゝろをとかむには春雨のしめやかにふりていとつれ〴〵なるをりからやどちかくおとづるゝ鶯の聲のうれしさはたまにあへる友などにとはれさるばかりにこゝちこそそれと辭に詠歎を含めていへるなりしかるを沫雪ともいはるとはいはゆる理不盡ともムヤミともいふべき論ずさまなりしかしひて題を動かさんとならば昔の歌にも梅を櫻にも月を雪にもかへばかふべき歌のなどかなからんしかはあれど此歌沫雪にかへては春雨ののどかなるおもふきにはいたくおとりぬべし

因に云源氏物語に雨夜の品定といへる條あり論者が心には雨夜にはかぎらず雪の夜にてもよしといはむの

閑居鶯　眞頼

鶯はむとく〳〵となくなれどまだ柴の戸はあくるおとをせず

○評論云結句柴の戸にはあくるおとなどなにとかや似つかず鶯のひとく〳〵といへるは古今集の俳諧歌に見えたれどさるを後にはいやしき詞とも辨へずなか〳〵にめづらしきふしに心得てよめるならんそはうれたきわざならずや今此集を見るに俳諧めきたる歌多し

○辨云柴の戸にあくるおとなどはをまうち合たる詞なるを似つかずとはいかでいふらむ又古今集なる俳諧歌をいやしき詞と思へるもこゝろえたがへりこれ彼集俳諧の部に載たる歌を後の世の狂歌といふものとひとしなみにおもふらんそはいみ

どきひがこゝろえあり俳諧歌とは事にふれ折にあひてよみいでたる心詞のおのづからつねのよりは一きはうち興じてたはれたるさまなるを漢籍の文字によりてしか名をおほせたるにて詞のいやしきを集めたるにはあらず古事記日本紀の歌をはじめ萬葉集にもこの俳諧体なるがあまた見えたりさてかの俳諧の部の詞をとりてよめる歌むかしよりおほかる中にも藤はかまにほころぶといふきり〳〵すはつゞりさせ雉子ほろゝとなくなどいへるみな常にいふ詞なり鶯はひとく〳〵なども その中の一ツにてきらふべきにはあらず又僧正遍昭在俗の比ものへゆく道に五條わたりにて雨のふりいでければあれたる門にたちかくれたるにその家なる女の「よもぎおひてあれたるやどを鶯のひとくとなくやたれとかまたむとひとりごちたること

大和物語に見え又光孝天皇の御製に「梅の花ちりぬるまでに見えざりしひとくとけさも鶯ぞなくと續古今集にも見えざるをあらむやさる書(フミ)をたにいまだ見ずわづかに古今集俳諧の部のみを見ていやしき詞なりなどみだりにのゝしれるはいとあさましき論者なりかし

花間鶯　　清綱

かざしむと思ひし花も鶯の木傳ふ見ればをられざりけり

評論なし

柳糸隨風　　美静

長き日をいとうちたれてくりかへす柳は風にむつましきかな

○評論云長き日をいとうちたれてくりかへすとはことを縺きてときかねたり

○辨云春の長き日に柳の枝の風に吹かるゝさまは糸をくりかへさやうに見ゆれど糸うちたれてくりかへすといひさてその風にしたがふさまをむつましとはいへるなるべしすべて糸の縁によりていひつゞけざるにていさくときがさきふしもあらず

風前柳　　葆光

さま〳〵ふすかたをかへて春風の心をとるは柳なりけり

○評論云四句心をとるとあるはいやしかゝるさまは世にこひ諂へる人のうへにこそあれそを我うへにいへるはいかにぞやと柳ものいひたらむにはやさしかるべし

○辨云これ柳が枝のふく風にしたがふさまを形容して心をとるとはいへるなり」心をとるとあるをいやし云云といへど源氏物語などにも多く見え古歌にもよめる詞にてめづらしからずさ

て子としては親の心をとるべく臣としては君の心をとるべきはいふもさらなり又つとめて英雄の心を攬るなども見えたればあながちにいやしき詞とはいふべくもあらざるをしひて世にこびへつらへる人のうへにのみかけて思へるは論者の心のひがめるにやあらんもろこしのむかし曾子といへる賢人は飴を見て老たる親を養はん事を思ひ盗跖といへる盗人は鎖を開かん事を思ひしといふ喩へはかゝるたぐひをいへるなるべし

河邊柳　　實政

紙屋川霞みすきてうつし繪ふさもよく似たる糸柳かな

○評論云四句優ならず諸平うしのよめる「夕かけにうつしおきてもすさめとや川上白く花の見ゆらむ此歌題はことなるへけれとすゐさもあらへもよしと思ふまゝにいふなり

○辨云四句優ならずとは例の論者が耳にのみしか聞ゆるならむさてはいかにはせむされどさしていふべき疵はあらぬなるべし

行路柳　正風

道の邊のしたり柳の陰もけは袖寒からぬ春風ぞふく

○評論云散花の雪と見えさらむ時ならでは寒からぬといふこと詮なしこゝろえられぬいひさまにて此歌腰をれさりや

○辨云袖寒からぬといふをは散花の雪と見えさらん時ならでは いふまじきをと心得さらんはあまりにも固陋なりや歌の言葉はしか定まりさるものにはあらずこは前に出さる一月の歌の評論に春と思はむには梅のさきさりとか霞のたつとかいふべく秋と思はむには風の涼しきといふべしとあるに同じくいふにも足らぬさふれことなりかし

柳經年　清綱

年をへてうつほふなりし古柳かた枝のみこそ春めきにけれ

○評論云四句かさ枝はもえて春めきにけりとあらむやかくいひては春めくさま見えずして叶ふへからずされどもえての文字初句のて文字にさはるをいかにせむ

○辨云柳の春めくといへは淺みどりにもえ出さるさまをいへるをしるし新古今集に輔仁親王「みよし野の大川の邊の古柳かげこそ見えね春めきにけりと見えさりさるをもえてといはでは春めくさま見えずといへるはよしなし

若草　實政

もえたれどうら若草の春はまたうすみどりなる野邊の色かな

○評論云初句いやしげに聞ゆるなりもえぬれどゝあらむや近比

の歌かゝるところを大かたもえたれとゝいへりそもくちをし

○辨云もえたれどハモエテアレドといふこと。もえぬれどハモエテイヌレドといふ意なり此歌にとりてハいづれにてもあるべけれど。もえたれどゝあるをいやしげに聞えてくちをしといへるハいかにかゝるところをかならずぬきとのみいふものと思へるハかたくななり

岸春草　重嶺

くまをおちず春の光やわたりけむ岸の蔭草もえ出にけり

○評論云岸にハかに出てよせなしなハ谷とも山ともいはるれはよみえたるものとハ思はれど

○辨云これ岸といふ題なればなかよめるならめど一首のうへにていはバ谷のかたまさりぬべし

春雨　粲

あらかりしゆふへのみなごなとりなくちつまる空に春雨ぞふる

○評論云雨ハ空よりふるものなるをさハいはて空に春雨ぞふるとハあやしけなるいひさまならずや

○辨云なの空にハ時をさすになり。といふてにをハその處をさし又その時をもさす辭なりされはあらかりし風ハなごりなくなづまりたる時に春雨がふるといへるなり新古今集に式子内親王「花ハちりその色となくながむれはむなしき空に春雨ぞふると見えたりなれらも論者が耳にハあやしく聞ゆるなるべし

夕春雨　粲

くれわたる霞のうちに光なき月ハ見えながら春雨のふる

○評論云初句る文字結句る文字かしましく三句光なき月とあるハ初學の耳よろこそすまてにて好ましからす春月を光なき月とよめるハすこふるをたらきふりなめれといやしくて例もなき言葉なりや「てりもせすくもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものそなきとよまれさりし此歌なとに心そゝきて朧月夜といへる詞のミやひなるをしるへし

○辨云初句る。文字結句る。文字かしましとハ例のかしましにて論者が耳にのミかしましと聞ゆるなりさらはそのかしましき例を思ひ出るまゝに二ッ三ッしるしてん

古今集「みとりなる。ひとつ草とそ春ハ見し秋ハ色々の花にそありける。

拾遺集。「櫻ちる木の下風ハ寒からて空にしられぬ雪そふりける。

新古今集「ときハなる。山の岩根にむす苔のそめぬみとりに春雨そふる。

これらやミなかしましからんさて霞のうちに光なき月とハいうち見さる實景をありのまゝにいへるにてあなかちに初學の耳を悦ハせんとにも又さらさふりにもあらさるべきをいかでさはかりハおもしろかりけんいといぶかし但此評語の中によくあさりてけにもとおぼゆるハ大江千里の君の歌のみやびをしるるべしといへるのミなりさるを此歌ハ新古今集に載りさりさてハ後撰集このかさの集も捨がさきものにこそ

夜春雨　　實政

思ふとち野山の花のしをさためつれ〳〵ならぬ雨の夜半かな

評論なし

夜春雨　　重嶺

梅か香もとり〳〵そやふ薫りきてさを静なる夜半の雨かな

○評論云初句も文字くちをし「閨のうちにをり〳〵梅のかをりきてとあらむやさてしも結句雨よせなくてもなるへし此句春の夜半かなとせむ題にハ叶ハねと歌の意とそれり

○辨云こハ夜春雨といふ題の歌なれば結句の夜半の雨ゐなれ題にて主なり梅が香ハ客なれば初句のも。文字ハ必あるべきところなり論者がいへるやうにてハ全く梅香入閨などの歌となるべしさてハ題意にさがへり題意さがひて別の歌とならんにハこゝろとそりさりとて詮なかるべし又結句雨のよせなくてもなるべしとハ何にもなるゝにゐ梅が香モトキ〳〵閨ニ薫リキテサテマア靜カナル夜ノ雨ヂヤナアといへるに外ニ何のよせをゐもとめんそも〳〵此評論の中にともすれむよせなしと難ぜる歌多しよせとハ縁の詞などをいふなるべしえゐ縁の語をとりあつめて一首を結搆するハ濱の眞砂麓の塵などいふ書にすがりてこづゐよみ出る初學びのこざなりされバすなしくちとけさるきもハ縁の語をばことにのがれて用ゐぬこそ心にくゝハ聞ゆきもやく源氏物語にも縁の語にまつはるゝを拙きものとしておとしめいひさりきさるを論者ハ萬葉集の歌に倣ふべしなどいひながら歌をことわるにハ上下の照應かけ合ひてにをはのさし合ひ同語をきらふことなどにのミもむらかゝハりていと後世風なるハいかなるをにか諺にいふ尻口にてものいふといふさぐひならんゐし

春夜雨靜　　正風

あし垣のしたり柳に朧夜の月ハかゝりて春雨そふる

○評論云初句あし垣といひさる詮なし此句あまりものなりれな

しくは我門とせんもさ叶ふべからむ
○辨云これ前に出さる山陰の小野山陰の庭などの類ひにてふとうち見さる實景のさまをいへるなるべけれバ詮なしあまりものなど論ずべきにあらざるべし

春雨靜　一豊　頴

露おもる柳のまゆもしふりのみさそひかねなる春の雨かな

○評論云初句る文字四句る文字かしまし
○辨云かしましくもあらぬる。文字をかしましくといふこそかしましけれいふにもたらぬことながら前に初句と結句のもてにあるる。文字の例をあげたれば初句と四ノ句との例をも一二首擧ぐべし
後撰集
「ひとりぬる。人のきかくに神無月にはかにもふる。初時雨かな
新古今集
「むれくもる。かけを都にさきたてゝおくるとつくる。山の端の月

幽栖春雨　篠　光

おとろすむ草のいほりは春雨のおとたふそのみまきれさりけり

○評論云初句くるしそむといふをいもまほしくてもてつけたることさなめれど此詞いもて聞えざりされもおつりなると改めんかさまさりなん猶なしりいもむには春雨の音もいかゝ春雨には音といふことふされを
○辨云心すむといふ詞は古歌にも多く見えて今もつねにいふ詞なりさてそのすむといふがおのづからに草の菴のよせになれるも歌のつねなりさるをもてつけたりとはおひたる難なり論者は此巻中の歌を評してよせなしくとおばくく難ドながらたまくよせあるをばもてつけさりといふもし作者が靜なる

草の菴とよまばもさらきなしとられのよみさるやうなりなど
やいふべからむ又春雨まれ音といふをふされどとれ例の春雨
まれ音せぬとの音のたづけさとの必いふべきものとかさくなま
こゝろえさるまて此歌のおとたまといへる辭を解しえぬなり
さるれあるりなきりの春雨の音たまも外ままぎるるものなく聞
ゆといへるまていと〳〵靜なる幽栖のさまを聞せさる辭づか
ひなりだまといへるてまをはま心をつけて見よかし

春月幽　香稗

なきつれてゆく鴈のねの聲すなり出てや見まし春の夜の月

○評論云鴈の聲聞えさらんまれ出ても見さるまやかくてれ月を
めつる情もなくて又幽なるさまも見えぬを題意ま叶ずていとつ
さなし

○辨云こは鳴つれてゆく鴈の聲を聞てことさらま月をおもへる
風情をのべさるまて幽の字の意れおのづから言外ま含みてあ
るべし

夕春月　祐命

鶯の今まてなきし柳原いつのほとふの月はいてけむ

○評論云三句柳原まれかまてよせなしあなかちまかくいせても
外ま言葉もあるへしさて此歌れ粲ぬしり「暮るまて柳ま見えし
春風れ梅の匂ひふなりまけるのなとよめるま品をかへさらん
やうのものまて一ッすのさなりいづきのおくれいづれのさき
立けん諸平うしり「暮ぬめり菫さく野の薄月夜雲雀の聲れ中空
ふしてとよめりこれまれたくもののなかるへし

○辨云よせのそれ前ま出さる重嶺ぬしの夜春雨のところふ委し

くわきまへおきたればさらにもいはずさて此歌粲ぬしの梅薫夜風といふ題の歌に品をかへたらんやうなればいづれか前後あるべしとはさらにえうなきさくじりなるべし粲ぬしの歌は日の暮るまでは柳の枝に春風のふくが見えしを日の暮ぬればその柳の動くは見えずなりて春風は梅が香のみおくりくることかなといふ意此歌は今まで鶯ののどかにさへづりゐて夕暮ともおもはれざりし柳原にいつのまにか月は出にけむといへるにて意も詞もみな異にて同じきは柳の一文字のみなるをいかに見て一ッすがたにて品をかへたらんやうなりなどはいふらんといぶかし

河春月

祐命

月影のおほろなる夜はかつら川水も霞のたゝちとぞすれ

○評論云四句いやし結句こゝちこそすれといへる詞今のはやりものと見えて初學の人やゝもすればいへり大方叶はぬかちなりそれはしばらくおきて此歌猶いひやうも有べし胤平ならば「月かげのおほろに見えて桂川流るゝ水も霞む夜はかなとをいふべけれど俄にひねり出せる歌にてよしとにはあらずこゝちこそすれといはぬまでのことなり

○辨云評論のいひさまのことは前にくはしくわきまへおきされど今此歌の評などはさらにとらへどころもなきいたづらごとなり四句水も霞のといへるが何故にいやしきにかこゝちこそすれはいかやうにて叶はぬにかたしかにいふべしさらでは論せるかひなし

故郷春月

粲

花の木は根にしてはふし故郷にひとり霞める春の夜の月

○評論云故郷の歌はうらさびたるさまによむべきものぞ花の木を根こじてなどめづらしげにいへるは九尺二間の裏店借り居さらむ賤しき者のすまひ移せるさま覚えて中々に趣を失へりといふべしかの「さゞなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かなかくてこそ叶ふべけれ

○辨云住みどころかへんに年比めでし花の木を捨がたく思ひて根こじて移し植けんみやび心をいかなればさか賤しげにはいふらんそはさておき此評論のはしたなく賤しきいひざまこそいはゆる裏店のものあらそひのたぐひならめ

太宰府神社奉納の中に社頭春月を　正風

梅花にほふ月にも神はなほみけしのかをやおほしはつらむ

○評論云二句ににほふとありて四句かをりとあるこは耳さはりにはあらずや初句二句つゞき優ならず月俄に出てよりところなしにもといふともをさなくきこゆるなり此歌社頭春月をよめるなれば梅はなくとも月のさまなにふかくいひてはつりあひよろし

○辨云二ノ句のにほふは梅の花の香ひなり四ノ句のかをりは御衣の薫りなるをはいふもさらにて梅の香と御衣の薫とをことさらに對へていへるなりさてにほふとかをりとを耳ざはりなりといへど香に匂ふなどいふもつねのことにて（續古今）「思ひ出て見にこさりせば梅の花たれにゝほひの香をうつさまし」（續詞花）「なつかしき香のみこそすれ山里は梅の匂はぬやどしなけれど」なども見えたり猶いくらもあるべし又月俄に出てよりところ

なしといへど梅と春月とはことにしたしき景物にて昔も今も梅の歌に春月をとりいれ春月の題に梅を結ぶもつねのことなればかた〳〵よりどころなしとはいふべくもあらずさて此歌二ノ句は梅が香のえならぬにほふ春の夜の月を見そなはすにつけてもといふ意にて下の句は恩賜御衣今在此捧持毎日拝餘香の句をおもへるなるべしさて又社頭春月をよめるなれば梅は無くとも月のさま猶ふかくいはでは つりあひよろしとはなでふことぞや此歌は太宰府神社奉納の中にとはしかきに見えたり天満宮と申す御神は菅原右大臣とて世にましゝ時よりことに梅をめでさせたまひしをは難波津におりたつばかりのさらはもしれるをありさて筑紫に流されたまひし時年比めでさせたまへる御庭の梅御あとをしたひて彼のところに飛びゆきたりといひつたへて今も社頭に飛梅と名つきたるありこをもまた昔より世にあまねくかたりつたへてたれもよくしりたるをなりさる神社に奉納の歌なればなにはあれどまづ梅をとりいでゝよめるなるべしさるを題社頭春月なれば梅はなくとも云云などいへるは小児にもおとれるしれこゝろなりかし

海上帰鴈　　清綱

おきつもし舟とも見えてきたつらの霞の波をかへる厂がね

○評論云四句波をかへるとあるはいかゞ波路をかへるなどいふへき詞ならずや

○辨云これ霞の波といへる詞を解しえずしていへる難なるべし霞の波とは霞を波に見たてゝいへるにてまことの波にはあらず霞のみを霞のまがきなどいへるにおなじされば波路といて

でもあしからずさて此句霞む波路をといはんはおだやかに聞えてつねのことなきされど夫木集に「からひとて霞の波をさつ鴈も難波のあしのうらみてそゆくなどあるは霞を波に見たてたるなりさるをもえしらでまことの波のことゝ思ひて路波といふべしなどいへるはいとをさなしそも〳〵人のよめる歌を評し難などつけんとならば少しは心をもはたらかし思ひをもめぐらしてこそいひ出づべきさまにはありけれ

待花　實政

花みのみ心はらもてのどかなる春をよろふを過すころかな

同　豊穎

はろかる心の駒は山里の花のつかひをまたでこそゆけ

此二首評論無し

朝花　冬道

大宮の春のみそのふうら〳〵と朝日のぼりぬ初花の上に

○評論云此歌をことば葉をならべたるまでにてさらにはたらきなし結句たゝ初花といひたるのみにてはことさられぬなり題朝花とあれも櫻なりやさて梅の初花又うち出る波や春の初花とはきゝされど櫻には覺束なし下の句大宮の御園生には限らず外のところまでもいはるべし諸平うしか此題にてよめる「なごりなくしらめる色をうしと見し花は朝日のかけ霞むなりこは敷島の大和心を種としてよめるなるべし

○辨云初花を櫻には覺束なしとはいかゝ昔よりうちまかせて花としいへば櫻のことゝなれゝば初花といへば櫻の初花なること論なし梅ならば梅の初花といふべし又うち出る波や春の初

花は何の花とも限らず春の初にさき出る花をおそよそふいへ
るなり下の句大宮の御そのふゐも限るべからずとある下の句
は上の句の書損なるべしさてこはさるところにてよまれたる
る歌なればなるべしもし外の處にてよまばおのづからそのと
ころのさまによまるべきにこそ

松間花　　　　　　　　　　　　　　　清　綱

嵯峨山の松の葉ふしみ見ゆるかなとなせの奥の花の白雲

○評論云嵯峨山の松の葉ふしはいづれより見たるにや又となせ
は瀧の名なるべしされども奥とあるもおさやかならす

○辨云嵯峨山の松の葉こしにとなせの奥の花の白雲の見ゆるか
なとあるを松の葉こしにいづきより見たるにやとはなにをい
へるにか聞わき難し又となせは地の名なり大井川の一名をも

となせ川といふよしものに見えて新勅撰集に俊成卿「となせ川
岩間にさゝむ筏士や波にぬれてもくれをまつらむ又續千載集
に定家卿「となせ川玉ちる瀨々の月を見て心ぞ秋にうつりもて
ぬるなど見えたりさればとなせの奥といへるも子細なし

里花　　　　　　　　　　　　　　　實　政

わらふうるわらやの軒ふさく花の色なつかしき山はなの里

○評論云結句山もなの里はいづれの國なるか名所にはあらさる
へしたゞし山なの誤にやならすは此歌花といふこと二ツ
有てうるさし

○辨云山もなの里は洛外修學寺村の方より八瀨大原の方に行く
道にて風景よき處なれば京の人はつねにゆきてあそぶ所なる
を京にうとき人の知らざるをばいかゞもせんされどならさら

んにもあらずといひてあるべきを山科は誤かさらずも花といふを二ッありてうるさしなどおしあてに難しいへるはをこなり山もなの文字も山花にもあらず山鼻なるべしそも地形によりていひならへるところの名にぞあらん

河上花　清綱

ゆく水なかれる見れは隅田川そこまて花はさかりなりけり

○評論云四句まてとあるはいやしさへといはゝや

○辨云までとあるを何故にいやしといふらむ古歌にも多くめづらしからぬ辭なるものをや

古今「わかやとは道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに

同「みやこまてひゝきかよへるからことは波の緒すけて風そひきける

なはいくらもありさてさへといふ辭はまでといふに心かよひて古歌など解くにはさへをマデと譯してよく聞ゆるもあれどさりとてその用ゐるところは異にてみだりにさへをまでにもまでをさへにも改むべきにあらずたとへばこゝよりかしこまで。上ミより下モまでなどいふまでをさへとはいふべからざるが如し今此歌なども梢のさかりはさらにもいはず河は底までといへるなればさへとはいふべくもあらず

橋上花　重嶺

たとりゆくかけはしよりも風わたる花のうへこそあやふまれけれ

○評論云初句あまりてきこゆ三句は渡るといふことあれはいはてされり此句けたくちしといひさらむにはあやふむ人もなかるへし

○辨云初句たどりゆくは我がたどり行くなり三句の渡るは風の

吹渡るなり我が渡るにはあらずされば初句あまりては聞えずいはでは詞足らずなん一首の意はかけはしぞあやふげになど我が身よりも風に吹渡る花の上のあやぶまるとなり桁朽ずとも棧(カケハシ)はあやふきものなりさるを殊更に桁朽しなどいはんにはそれこそあまりものならめ

山花　　篠光

ゆくまゝにちかまさりして山の端の雲は櫻になりにけるかな

○評論云結句例のけるかなにて叶はぬけるかなるへし

○辨云けるかなのことは前の粲ぬしの梅薫夜風の歌のところにこちされまでいひされはさらにいはずかしこに見合せて此歌のけるかなのよくかなひてあることをさとるへし

霞中花　　冬道

大原やをしほの山の花はなほ花とにほへる朝霞かな

○評論云三句より下力なし花に猶にほひそへたる朝霞かなとせは立まさるへし

○辨云花はなほ花とにほへるとあるは古今集に「秋の夜の露をはつゆとをきながら雁の涙や野邊を染むらんとある二三句におなじき詞づかひ殊に力ありと聞ゆるを力なしといへる論者の力のほどこそ思ひやらるれ又これを花になほにほひそへたるといはむは無下に黄嘴のいひさまなるのみならずさてはなほといふ詞いさゝか後の世のつかひさまにて俗意になれるをしらざらんもをさなし

霞中花　　實政

飛ふ蝶のゆくへと見れは春霞ひとむら白し花やさくらむ

○評論云春霞ひとむらとつゝきさるは心ゆかし花にひとむらといふことはきかさりけり霞にもいはぬ詞なるへし

○辨云かゝる固陋寡聞の難には多く言葉を費すにもおよばねば思ひ出る古歌二首を擧く

玉葉集「ふきよわるあらしの庭の木のもとにひとむら白く花そ残れる

新古今集「足柄の關路こえゆくしのゝめにひとむら霞む浮嶋か原

これらにて花にも霞にもひとむらといふことあるをしるへし

翫花　美静

くもゐには篝やたかむ春の日も長しとしらぬ花の木のもと

○評論云くれゆくは木の下に篝たかんとはこと〳〵しからすやこれ花をめつる心からとはいへとそのさまいやしくてうま人にはあるましきさなりかの「けふのみと春を思はぬ時たにも立ことやすき花の蔭かはとよめる歌のみやひなるをしるへし今の大御世の人此しらへには立まさるやうあらまほし

○辨云此評論を見るにまづ歌のこゝろはかつ〳〵聞しりさらんさまなるを篝火をそのさまいやしくうま人にはあるましきわざとないへるはいかに源氏物語に「おまへの篝火すこしきえがたなるを御ともなる右近のたいふをめしてともしつけさせたまふいと涼しげなりや云云たえず人さふらひてともしつけよ夏の夜の月なきほどは庭の光なくいとものむづかしくおぼつかなしやとのたまふ「篝火にたちそふ戀の煙こそよにはたえせぬほのほなりけれ云云とあるは六條院の西の對にてのさまなり此論者は俊成卿のいはれし源氏見ぬ歌よみなんかし

靜見花　豊穎

櫻さく窓の夕づけのどかなる心をしらて飛ふつばめかな

○評論云二句夕づけははなれものなり此歌題意に叶はずつとめてよめる歌めきたり

○辨云此論者ともすればあまりものはなれものといふが口くせなれどこは櫻のさける春のゆふべのことにのどかなる所のさまをあらはして窓の夕影といへるにて題の靜の字に對せる眼目なるべければはなれもののたぐひにはあらざるべし○つばめをよめる歌めきたりとの難はさることなきにしもあらねど猶いはばその燕のいそがはしげに飛ぶさまを見てかくばかりのどかなる春の夕暮ともしらで靜心なく燕の飛ぶことかなといへるにおのづから我は靜に花を見たる情を含みて聞ゆべし

靜見花　　清綱

をさまれる此大御代にあはざらば心のどかに花を見ましや

○評論云結句花といふをありて上に春のさまなしかくてはいかゞ月を見ましやともいはるゝなり題はことなるべけれど諸平うしがよめる「君がため花と散けむますらをに見せばやと思ふ御世の春かなかくいはば動くべからず

○辨云いかなればかくもおろかなることをばいふらんおもふに此論者はいたく後世風のつくり歌になづみたらん詞のよせといふことにのみかゝはりて下モに花といへば必上ミに春のさまか又は花の縁語なくては叶はぬものと心得たるなるべし縁語のことは前にくはしくわきまへたればさのみいはず今は此歌の難にこたへて下に花といひて上に春のさまも花のよせもなき古歌どもを思ひ出るまゝに二ツ三ツしるしいでつ

古今「年ふれはよはひは老ぬしかあれと花をし見れは物思ひもなし

後拾遺「世の中を思ひ捨てし身なれとも心よわしと花に見えける

新勅撰「古郷のあれまくたれかをしむらむさか世へぬへき花の蔭かな

又これ花を月ともいはるゝなどは無下に歌のこゝろしらぬしれでとにていふにも足らずなん

静見花　　　眞頼

さきてよりひと日しづかは櫻花見るみのとけしちらじと思へは

○評論云二句四句優ならず花さけはたゝに散ことのみ心かゝりにて安からぬにやかくいひてはおもしろけなしまちゐたる花のさきたらんにはちることなど思はてうちよろこふそ人の常なるされは猶いひさまも有へくや

○辨云花のさきたらんにはちることなど思はでうちよろこぶぞ人の常なるといへるはいとあさましき俗意にて深く花をめづる情をも歌のこゝろをもしらぬなりけりさるは櫻の花はことに盛りのみじかきものなればまちにまちてさけるやがてちらんことをぞ惜むがみやびなる人の常の情なりさるを花のさけば散ることなどは思はでうちよろこびてのみあらんは心なきわらはべなどこそあらめすこしものゝあはれしられんきはゝさはあるまじきものをや「世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからましなどあるをば此論者はいかゞおもふらん

雨中花　　　資之

たのめけぬそれまぞ見えぬ春雨にさける櫻のをしくもあるかな

○評論云さかてあらなむといふへきをさはいひかねてさける櫻のをしくも有るなといへるにかをしといふことゝにいふへ

き詞ならす景樹か「うちそへて霞にこたれるきれふけふさかぬもをしき山櫻かないつもかやうなるそらことをいひ出てあやまりを誤りともしらすや有けむ此歌をしきとあるハなしりいたんもさらなりかゝるふしに習へるものにや

○辨云さかてあらなむといふべきをさハいひかねてさける櫻のそしくもあるかなといへるにかといへるハまたく此歌のこゝろを解しえずしてみざりによしもなきことといへるにていとあぢきなしまづ一首の意ハコノゴロ櫻ガサイタ然ルニ昨日今日晴間も見エヌホドニ春雨ガフルコノ雨デハ折角サイタ花ガウツロフデアラウサテ〳〵惜キコトヂヤナァといへるにて子細なく聞えたるをいかなれハ解しえずありけんさるをさかであらなむといへハサカナイデアラウナラヨイといふ意なれハ上の句にうちあはずこゝろも異なり○景樹の歌ハこゝによう なけれハいはず

折花　葆光

さはかりハ風の心にまかせしとたをるぞ花を惜むなりけり

評論なし

馬上見花　正風

のとかにを見つゝゆくゝも花蔭をいさめる駒にのりてけるかな

○評論云いさめる駒をのりしつめて花の木かけハ行くへきをかくいひてハ心さわかしくてそのさま手綱とるすへもしらさるものゝやうに見ゆるなりさてハくちをしからずや「木のもとにいさめる駒をひきとめてかへり見すれば花そちりくるかくいひてハ聞ゆましくや

○辨云此評論者ハ太刀かきのこざをほこらしげに序文にいへる

が馬乗るこざにもまたすぐれたるらんいと雄々しかしされど此書には歌のよしあしをおきて馬のるわざの上手と下手とを論ぜんもよしなかるべければとかくいふにおよばず歌の心の優なるをばしる人ぞしるらんかし

花上月　實愛

しら雲の中にすむとや思ふらむ花の上野の春の夜の月

○評論云二句中といふこといかゞこゝは上といふへきところならむを四句上野の上かさなれはかくはいへるなめりくちをし

○辨云白雲と見ゆばかりさきみてる花の木の間より見ゆる月なれは白雲の中といへるにて上野の上の字をさけさるにはあらさるへし

花下言志　實政

さくもとしちるもとし野の山櫻いさきよきこそほまれなりけれ

○評論云四五句殊につさなくてさくしりいふまでもなき歌なり

○辨云四五句いさきよきといふこともほまれといふこともふるく歌にも文にも例ある詞なるをつさなしとのみいへるは例の論者の心にしかおもへるならん

隅田川に花見しける日によみ侍ける　美静

すみた川つゞく櫻につゞく人舟を心をみなうかひつゝ

○評論云つゞく櫻といふこといかゞ萬葉集に巨勢山のつら〳〵椿なとよめるさくひにてつらなるなといふへき詞ならん結句もをさなし舟はうかひつゝも優ならを心もうかひつゝといいゝなることか聞とり難しうかれつゝといふへきところにや

○辨云つゞく櫻とは櫻は花のさきつゞきたるなりそはさきといふことをもふけるはつゞく人といひつゞけて詞をさゝまんがさめなるべしまた舟はうかびつゝといふはつねのことなりそは縁によりて心のうきたつをもともにうらびといへるなるべし

落花隨風　　　　豊頴

うらめしき風のゆくへをいつまではかぬくしなぬ櫻なるらむ

○評論云四句もかなくとあるは叶はぬは櫻の風をしたふとはことやうなりたくみに心うもゝれてまことを失へるもさなるへし

○辨云風にさそはれて花はちりゆくさまをかへりて花の風をしたひてゆくらんとやうにうらうへにざれていひさるが此歌は趣向なり新古今集に俊成卿女「うらみすやうき世を花はいとひつゝさそふ風あらはと思ひけるをもなどあるをもてなぞらへてしるべし又もかなくといふ詞をこゝに叶はぞとはなどいふらんもかなくはもかりなしといふことにて物事定めなきをいふよりおし移りてはかりそめなること又トリトメナキ事などに用ゐる詞なればこゝはよく叶ひて聞えざり

落花浮水　　　　資之

海邊より汐のみちきて隅田川流るゝ花をとゞめかほなる

○評論云一わたり聞えてはあれど其さまいやしくてみやびならず

○辨云いやしくみやびならぬとのみいひてさるゆゑよしをいはねばいさづらでとなり

野雲雀　　　　清綱

難波津をけさたちくれぞ住吉の遠里小野に雲雀鳴くなり

評論なし

遲日　　香稈

たよりする大路のいとをはる〳〵と霞みて長き春の日の影

○評論云三句はる〳〵とありて又結句はるの日といへるはうるさし大路の糸とはいかなるものかてりからふのことにやされは叶ふへからす詞は心にまかせ口にまかせてはいはれぬものふて近ころめつらしき題をえておのかまゝ〳〵名をつけ詞をつくりてよめる歌多し狂歌俳諧ならはさてもあるへけれといとみさりかはし

○辨云はる〳〵といふことゝ春の日とをうるさしなどいふはあまりにしれたることにていかに同語をきらふ後の世風なりともいまだかばかりうつけたることといひしためしを聞かぞあきれてもれもいはれぞなん○電信機即ちてれがらふをたよりはる大路の糸といへるにつきていへることゞもは大方さるにとまて初學びのふどなどはしらまめやかに心得てよくまもりたらんぞよろしかるべきされはよろづの道古へにもたちまさりて年月にひらけゆく今の大御代にあひてもじめて見る物聞く物も多かるを昔なきものなればとて今こゝろに思ふことを歌によみ出ることのなりがたからんはあぢきなきわざにてかへりて歌といふものゝ本義を失ふなるべしそは古き歌書どもを多く見ばおのづからしらるべしさてその昔は無かりし物聞えざりし詞どもを初めてよみいづともその歌のよきとあしきとは言葉のつかひざまによるなり今これたよりはる大路の糸といふことのよしあしは聞く人の心になるべければしばらく定め

ず胤平ぬしはいかゞいふらむきかまほしかゝる處にてこそ胤平ならばかくはよめといふべかりけるをひねり出されしにやありけんいと念無し

雨中蛙　　眞頼

さくらちる春のゆふべは雨のおとに物思ひをれば蛙なくなり

○評論云三句雨よせなし蛙も鶯郭公などのやうにうちつけに鳴へきものならす此歌ものおもひをれど蛙鳴とあるも俄に鳴出さるさまなりかくてはいかゞあらむ蛙は雨を待ちて空の曇りたらむ夕には殊更に聲きほふものなれど雨の音にぬしか物思ひせぬさきより鳴さるなるへしさなけれは此蛙はふれさるにやありけむ

○辨云よせのことは前にくはしう辨しおきたれはいふにおよばず物思ひをれば蛙なくなりとあるを俄に鳴き出さるさまなりといへるはたがへりこそ物思ひをれば蛙が鳴クワイといふことにて俄なるにもその前より鳴てあるにもかゝはらさることにはあらず古歌の例になほかり擧るにさへずさて又蛙は鶯郭公などのやうにうちつけに鳴べきものならず雨を待ちて云云などくだくだしういとむづかしげにいへるは心得られず蛙は俄にも鳴いで又をやみもし長きあひだも短きほども定めなく朝にも夕にも月にも闇にも鳴くものなり空の曇りたらん時に雨を待ちて聲きほふにかぎりたるものにはあらず

月夜蛙　　粲

青柳のかげゆく水は見えねども蛙鳴なりおぼろ月夜に

○評論云夜の歌なればことさらに青柳といはてありなん初句柳

かけとして二句流るゝ水はといはゝまさるへくやしかれとも
水の見えむには蛙の鳴へきこともなければ此歌おぼつか
なし「柳かけ流るゝ水もほの見えて蛙なくなり朧月夜にともい
はゝ常のことにはあれと叶ふへかめり

○辨云青柳といふことは前にも辨せるごとく大かたうちまかせ
て柳をいへる例なれば夜なりとも何かはあしからんまた水の
見えぬには（○評論には見えむにはとあれどさては論の理りたゝず見えぬの書損ならんことしるけれは今改む）蛙のなくべき
ことわりなしとは歌の意を解しえぬなりこは月の霞みて柳の
陰ふかく水の見えぬ朧夜のさまをいへるにて見えぬといふにか
へりて水のあることのしらるゝをさとらぬはやいとあぢきな
し

若鮎　　清綱

青柳のかけ川たひしてのほるらし玉島川の春はをかしも

評論なし

水邊躑躅　　祐命

水あせし野澤乃岸のいはねにし小松まじりに花さきにけり

○評論云初句水あせしとあるは秋冬のさびしきさまをいはんと
ならはさもあるへけれとつゝじのさく頃にはふさはぬ歌なま
むにはかやうなるところに心とむへきもれそおなしくは清水
とくともいふへし二三句澤に岸も野に岩も似つかす四句小松
まじりは青葉まじりのおそ櫻といへるにはくらへいふへくも
あらす句々つたなくやまた意は小松ましきに花さきにけりと
いふにとゞまれりかゝることは童もいふへし

○辨云水あせしとて必秋冬にかぎるものかは水のかれて淺くな

そさらんをばいつまでもいふべし清水わくも夏めきてかへり
てふされしからぞ野澤に岸といふこと何の似つかはしからぬ
ことかあらん又いもつゝじは和名抄にも羊躑躅和名以波豆々
之とありてその木の名なればいづこにもいふべし此歌實景う
ち見さるまゝをいへりとおぼしくて彌生ばかりまだ春草も深
からぬ野中の淺澤のほとりなどにさゝやかなる躑躅のさきた
るさまおもかげうかびて見ゆるをかゝることはさられもいふ
べしなどいたくおとしめたるは心得がたくなん

水邊藤　　冬道

川上の岩まのわかゆくみふたて今年ぞ見つる藤波の花

○評論云四句ことしぞとあるをことしもといもゝやぞらかに聞
えて意もふかくくまるへくなむ

○辨云ことしぞ見つるとは今年初めて見たるなりことしも見つ
るといへば去年も見まさ今年も見つるなり歌の意たがふこと
なるをみたりに改めんとはいかに

海邊春夕　　粲

島山のひとむら霞海原のうへにおほひて日はくれにけり

○評論云一むら霞とはそら言なめりまた霞をおほひてとはいか
てかいふべき歌よまむには趣こそめつらしきをとるへけれ詞
は古へより定まれるものなれぞさりとはいふへからす近比
の人そのことわりも辨へなく口にまかせていへるそれあやな
きこさなりけり結句俄にてよりところなし

○辨云霞にひとむらといへる例證は前に擧げたればさらにもい
はず又おほふといふことは萬葉集に「あめのおさすてにおほひ

てふる雪の光を見れもたふとくもあることゝあれば霞にいもん
もあしからじ

春心　　香穉

よか身にをまかせぬそのはちる花のうらになしゐる心なりけり

○評論云二句つゞきなし四句空にうかるゝとれなといもさりけむ

○辨云まかせぬものなどいふはつねのおとなるを何故につたなしといふらん又四ノ句ハ散ル花ガ我ガ心ヲソラニシタルといへるなり心をそらに心そらなるなどいひて心ノアテドナクウカヽヽとするをいふ詞なり空にうかるゝといへば花の散る空に心のあくがるゝことゝなりてそらになしさるといふとはこゝろ異なるをや

春野　　資之

若草のもえ出る春になりにけり心をのへにたれをさそはむ

○評論云子の日の歌にいのちをのへなといひかけたるか見えたれと若草に心をのへとはいひかことならずや

○辨云野邊に延べを兼たるのみの詞なるを何故に子の日の歌に命をのべといふにかぎりて若草の歌に心をのべといへるはひがことにかあまりにも忘れたることといふ論者かな

春海　　粲

かすめるはかけのみ白く見ゆるうな霞こもれるうな原の上に

○評論云二句影といふこといもてあらずや結句くるし春の海つらとれなといもさりけむ諸平うしかよめる「おきかけて霞みにけりなそなれ松なれのみ春の色と見しまにかくてこそめつらしからめ

○辨云かげとはその鷗のさつさまをいへるなりおもかげなどの
かげはおなどさるをいはであらばやといふをみればもし海原
にうつる影のことゝやきゝひがめけむいとおぢきなし又結句
かいなでの作者ならば春の海原ともよむべし

松高白鶴眠といふ題にて春の歌よめと人のいひ侍りければ

祐命

山松の枝をならさぬ春風は鶴の夢ふをさはらさるらむ

評論なし

暮春山吹

資之

歸るとて垣ねを春やこえつらむちりみだれたり山吹の花

○評論云歌のさま猶ミやひはいふへきふしもやありなん垣ねの
ね文字あまれり犬か盗人のこえたらんにはさこそあらめ

○辨云垣ねのね文字あまれり犬か盗人のこえたらんにはさこそ
あらめといへるをもておしはかるに此論者は垣根といふこと
を文字になづみて垣の根とや心得たるらん垣ねのねは添へて
いふ詞にて屋根の根におなじ岩ね岸ね嶋ね羽ねなどの類みな
しかり古へは物の名にねてふ言をそへていへる例多し物知ら
ぬにもふどこそあれかばかりのことだに知らで人のよめる歌
にくちいるゝはかへすがへすもをこめきたる論者なりかし

暮春山

實愛

まかひつる花はいつしかちりはてゝ雲のみ殘る春のおく山

○評論云結句くるしけに聞ゆるなり遠山とせむやそらにまてた
ちまさるへくや

○辨云春のおくといへるに暮春の意を含めていはれしなるべき

を此論者はさまでは聞わかずやありけん

惜春　　正風

櫻花ちりし木すゑをまもるまに春をむなしくなりにけるかな

○評論云ちりし木をなをまもるとは心ゆかぬいひざまなり此詞は
こゝにいひては叶ひがたくや同じ題にて諸平うしのよめる「ち
りはてむのちのかたみと花の香をしめし袖にもあすやとかれ
むかくてこそみやびならめ

○辨云まもるといふ詞をいはゞ心得てこゝにかなひがたしとは
いふらんまもるノまは目にて目をはなたず見ることをなされ
ばあらでちりにし花の深く惜まるゝ心を此詞にてうつしえら
れたりといふべし論者は此まもるといふ詞をも前の垣根のた
ぐひにてよくもしらぬなるべし

春之部　畢

明治十八年十二月十八日出版御届

著述人　東京府士族　鈴木弘恭
東京小石川區竹早町拾三番地

出版人　仝　平民　吉川半七
仝　京橋區南傳馬町壹丁目拾貳番地

發賣人　仝　京橋區南傳馬町貳丁目　文雅堂

同　仝　日本橋區通四丁目　金花堂